

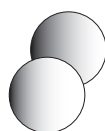
第36回地域医療現地研究会を取材して

日本一の米どころ、酒どころ 新潟で語り合おう わが街の地域包括医療・ケア

～白鳥の飛来する地で実践する地域医療 愛着ある地域医療を見つめて～

— 新潟県新潟市・阿賀野市 —

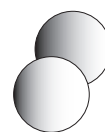
厚生科学研究所編集部



はじめに

コロナ禍で中断していた国診協・国保中央会主催の第36回地域医療現地研究会は、令和4年5月13日（金）・14日（土）の2日間にわたり新潟県新潟市と阿賀野市で3年ぶりに開催した。テーマは「日本一の米どころ、酒どころ 新潟で語り合おうわが街の地域包括医療・ケア～白鳥の飛来する地で実践する地域医療 愛着ある地域医療を見つめて～」であった。今回は全国各地の国保直診・国保連合会関係者など、168名（会場132名、WEB36名）が参加してハイブリッド形式での開催となった。

阿賀野市は平成16年に安田町・京ヶ瀬村・水原町・笹神村が合併し誕生した市で、新潟市から南東に位置する。人口は令和3年4月現在4万238人で、阿賀野川の清流が西を流れ、東の五頭連峰との間に美しい田園風景がひろがる自然豊かなまちである。



現地研究会1日目：5月13日（金）

[開講式]

1日目は午前10時より「朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター・国際会議場」（写真1）で開講式が行われた（写真2）。はじめに国診協小野剛会



写真1（上）会場となった朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター、写真2（下）開講式



写真3 (上) 国診協小野会長の挨拶、写真4 (下) 国保中央会原理事長の挨拶

長から挨拶があった。小野会長は「地域医療現地研究会は、1987年から長年開催されている国診協の主要事業の一つである。毎年5月に全国の国診協会員が地域包括医療・ケアに積極的かつ先進的に取り組んでいる会員施設に集まって現地の気候風土に触れながら視察・研修を行い、また現地の方々との交流の中で地域包括ケアシステムの真髓を学ぶことが目的である。今回、新潟のあがの市民病院長藤森勝也先生のリーダーシップによってWEB配信を併用するなど、さまざまな創意工夫を行いながら安全な感染対策の下に本研究会が開催できることに大変うれしく思っている。

今回視察研修させていただく、あがの市民病院は予防・医療・介護を総合的に担い、急性期から回復期・慢性期・在宅医療まで幅広く対応する地域密着型の病院であり、積極的に地域に出向き健康づくりを推進するなど、地域と一体となった地域包括医療・ケアを実践している。まさに地域最適をめざした取



写真5 新潟県国保連合会小林理事長 (出雲崎町長) の挨拶

り組みは、多くの国保直診にとって大変参考になるものと確信する」と述べた(写真3)。

次いで国民健康保険中央会の原勝則理事長より挨拶 (WEB参加) があり、「現地研究会では自分の目で現場を見て、直接現場の声を聴き、現場の空気に直に触れることで研修効果が高まり、明日からの仕事へのモチベーションにつながるものになる。そういう意味で、今回現地研究会を実施できることは大変意義があるものと思う。

地域包括ケアシステムの構築、地域包括医療・ケアの実現は道半ばである。困難な状況はまだ続くと思うが、地域包括ケアシステムの提唱者である故山口昇先生の叱咤激励の声が今も天国から聞こえてくるような思いである。小野会長を先頭に国保直診施設で働く皆様方が、ご自身の健康にも気を付けていただき、長年培ってこられた経験や知識を大いに生かして地域住民の医療や介護サービスの確保・健康づくり・地域づくりに貢献されることを期待する」と述べた(写真4)。

続いて新潟県国保連合会理事長 (出雲崎町長) の小林則幸氏が挨拶を行った(写真5)。次に新潟県阿賀野市長の田中清善氏が、「阿賀野市は現在高齢化率が34%で、2040年には43%と推定される。そこで阿賀野市では健康寿命日本一を目指しながら、地域包括医療・ケアの充実に取り組んでいる。今高齢化社会の中で、すべての人がいつまでも住み慣れた地域で生き生きと暮らしていけることが阿賀野市の政策目標である」と述べた。(写真6)。



写真6（上）田中阿賀野市長の歓迎の挨拶、写真7（中）新潟県花角知事の代理で来賓の挨拶を行った松本新潟県福祉保健部長、写真8（下）第36回地域医療現地研究会の藤森実行委員長によるオリエンテーション

次に来賓の挨拶として新潟県花角知事の代理として新潟県福祉保健部長の松本氏より挨拶があった（写真7）。最後に第36回（令和4年）地域医療現地研究会実行委員会委員長のあがの市民病院長である藤森勝也氏より今回の地域医療現地研究会のオリエンテーションがあった（写真8）。



写真9（上）3台のバスに分乗して施設の視察に向かう、写真10（中）あがの市民病院外観、写真11（下）藤森病院長自らが病院の部署を説明

開講式終了後、3班に分かれて3台のバスに分乗し施設視察に向かった（写真9）。

[施設視察研修]

○あがの市民病院（写真10）

まず向かった先は、あがの市民病院である。あがの市民病院では1Fの受付・会計の横の階段を上り、藤森勝也病院長自ら先頭に立ち（写真11）2階の



写真12(上) 訪問看護ステーション、写真13(中) 人工透析室、写真14(下) 介護医療院

地域医療連携センター・訪問看護ステーション(写真12) やリハビリ室、3階の人工透析室(写真13) や介護医療院(写真14) などのいろいろな部署を回りながら説明をいただき、医局前の廊下には研修医の方々の感想文と記念写真が数多く掲示されていた(写真15)。特に印象に残ったのは、300台駐車できる駐車スペースが8割ほど埋まっていたこ



写真15(上) 医局前の廊下に掲示されている研修医の感想文や記念写真、写真16(中) 窓の下に見える300台駐車できる駐車スペース、写真17(下) 瓢湖

とである(写真16)。ここからも、地域住民の支持と3期連続の黒字経営を目指す病院長の熱意を感じた。

○瓢湖、水原保健センター、北方文化博物館の視察
 昼食後、5千羽の白鳥が飛来することで有名な瓢湖(写真17)を視察した。視察時は羽を痛めて帰



写真18(上) 写真19(中) 水原保健センター、写真20(下) 越後随一の豪農であり大地主であった伊藤家の屋敷ある北方文化博物館

ることができない白鳥が20～30羽ほどいた。その後、阿賀野市役所に隣接している保健活動の拠点である水原保健センター(写真18、19)を訪問。1階では2つの診察室を利用してコロナワクチンの接種会場として活用している。2階には健康ギャラリーや研修室(180人収容)があり、健康研修会や講演会などにも使用しているとの説明があった。



写真上から21～23 北方文化博物館

次に越後随一の豪農であり大地主であった伊藤家の屋敷である、北方文化博物館(写真20、21、22、23)を視察した。屋敷の門をくぐると藤棚が迎えてくれて心地良かった。さらに春夏秋冬の美しさに魅了される庭園に面した大広間の屋敷や、歴代当主が収集した古今東西の美術品や骨董品などを自由に見学した。その後、バスで朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターに戻り1日目は終了した。



写真 25 (上) 全体討議、写真 26 (中) 全体討議の座長を務める藤森あがの市民病院長、写真 27 (下) 発表者の佐藤阿賀野市健康推進課成人係長

現地研究会 2 日目：5 月 14 日 (土)

[全体討議]

2 日目は朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター・国際会議場において午前 9 時から「日本一の米どころ、酒どころ 新潟で語り合おうわが街の地域包



写真 28 (上) 発表者の藤原新潟大学大学院特任准教授、写真 29 (下) 発表者の辻内あがの市民病院歯科口腔外科部長

括医療・ケア」をテーマに全体討議が行われ (写真 25)、新潟県国保診療施設協議会会長のあがの市民病院長である藤森勝也氏が座長を務め (写真 26)、佐藤美穂・阿賀野市健康推進課成人係長 (写真 27)、藤原和哉・新潟大学大学院医歯学総合研究科健康寿命延伸・生活習慣病予防治療医学講座特任准教授 (写真 28)、辻内実英・あがの市民病院歯科口腔外科部長 (写真 29) の 3 名から発表があった。

1 人目の佐藤美穂氏からは「めざせ!! 健康寿命日本一の取り組み」をテーマに発表があった。令和 2 年度特定健診結果 (40 歳～74 歳) によると、特に糖代謝判定で異常が多くみられた。そこで阿賀野市としては、健康寿命延伸に向けた寄付講座を設置した。その 1 つは新潟大学の藤原特任教授と共催で行っている生活習慣病予防講座がある。具体的には、2014 年度からの中学 2 年生の血液検査の実施と 2015 年度から行っている成人式での健康診断と



写真 30 (上) 助言者の森田厚生労働省保険局国保課長、
写真 31 (下) 同じく助言者の海保国診協副会長

しての 20 歳の健康プレゼント事業である。特に 20 歳の場合、親が意識して子どもは友人同士で成人式に来ることが多く、今年は出席者 280 人中 180 人が血液検査を行ったとの報告があった。

佐藤氏の発表後、厚生労働省保険局国保課長の森田博通氏より助言があった(写真 30)。「20 歳の成人式でのアプローチはよく考えられた取り組みである」と話された。次に国診協副会長の海保隆氏より助言があった(写真 31)。「令和 2 年度特定健診結果の糖代謝判定で 77.1%と高い要因としては、米どころ酒どころが影響していると思う」との発言に対して佐藤氏は、阿賀野市民の飲酒の多さと車社会で運動不足に原因があるとの話であった。

2 人目の藤原和哉氏は「世代を考慮した生活習慣病診療」をテーマに発表があった。まず、2014 年から 2021 年の阿賀野市での取り組み「中学生生活習慣病予防事業」を説明された。米国国立睡眠財団

によると世代ごとで推奨される睡眠時間があるが、許容される睡眠時間は 7～10・11 時間ということ。

一方、阿賀野市における同事業報告によると、遅い就寝時間が睡眠不足になり朝食の欠食につながっている可能性があることと、中学生でも標準体重と比べ肥満では心血管代謝異常リスクを有する可能性が約 2.9 倍高まることが明らかになった。対策としてメタボ異常の原因となる悪循環 [スクリーンタイム (スマホ) →遅い就寝→朝食欠食→不活動] を断ち切り、生活習慣を向上させることが重要である。具体的には、スマホを 2 時間以上見続けると過体重になるので、不健康な生活習慣を重ねないことと、午後 10 時半ごろから就寝の準備をして 11 時までには就寝して午前 7 時に起床して朝食を取ることが大切であると報告があった。

藤原和哉氏の発表後、厚生労働省保険局国保課長森田博通氏より助言があった。「阿賀野市の中学 2 年生全体として朝食のデータがとてもわかりやすかった。また、中学校区の数値を行政のポピュレーションアプローチとしてどのように行っていくのか、初めて中学生のデータを拝見したので興味深く感じた」と話された。次に国診協副会長の海保隆氏より助言があった。「問題は情報提示の仕方や指導のあり方だと思う。中学生個人の指導だけでなくご両親を含めて家庭を指導して、家庭の生活習慣を改善する試みが大事だと思う。今後はどのような指導方法を行って、生活習慣の改善に結び付けるのが課題だと思う」と話された。

3 人目の辻内実英氏は「当科における訪問歯科診療への取り組み」をテーマに発表があった。あがの市民病院では 2003 年併設の介護老人保健施設や隣接した特別養護老人ホームでの専門的口腔ケアを開始し、2009 年口腔ケアを主とした訪問歯科診療を移転した特別養護老人ホームに対し歯科医師月 1 回、歯科衛生士週 1 回で開始した。2016 年からは常勤歯科医師を 2 名 (非常勤歯科医師: 4 日/月) に増員し、常勤歯科衛生士も 3 名体制で現在訪問歯科診療を行っている。

訪問歯科への流れでは、連携している介護施設・家族や本人・他院や他施設からの紹介もある。さら



写真 32 閉講式で次期開催地の紹介を行う大原綾川町国保陶病院長

に在宅歯科医療連携室や入院中・外来通院からの継続の方や訪問看護からも依頼がある。その後、当院の地域医療連携センターで受付を行い、カルテを作成し訪問歯科診療が開始される。問題点としては、症例に応じて訪問歯科を行えるが、患者のライフステージの変化に応じた適切な歯科治療や口腔ケアを受けられないことである。つまり、地域の歯科診療所の訪問歯科診療体制が必要としている患者に対して十分とは言えない。今後の課題では、阿賀野市の病院歯科として地域の歯科医院や在宅歯科医療連携室とも連携し、地域の歯科医療を支えていくことである。辻内実英氏の発表後、厚生労働省保険局国保課長森田博通氏より助言があった。「地域住民のライフステージという難しいことに取り組まれていて、これからの介護予防健康づくりの取り組みを応援したいと思う」と話した。次に国診協副会長の海保隆氏より助言があった。「新潟県に在宅歯科医療連携室が16か所も設置されていることは素晴らしいことだと思う。マンパワーの問題もあると思うが、今後は子どもたちへの口腔ケア活動にも取り組んで



写真 33 閉会の挨拶を行う海保国診協副会長

ほしいと思う」と話した。

[閉講式]

11時より閉講式が行われた。まず次期開催地の香川県国保診療施設協議会会長の大原昌樹・綾川町国保陶病院長より挨拶があった(写真32)。テーマは「with コロナ、after コロナ時代における地域包括医療・ケア」であり、令和5年5月12、13日に観音寺市のハイスタッフホールなどで開催するとの報告があった。施設視察研究先は三豊総合病院と香川県国保病院原点の地旧国保永康病院が、令和4年に新病院として開院した三豊市立みとよ市民病院との紹介があった。

最後に国診協副会長の海保隆・千葉県国保直営総合病院君津中央病院長より開催地への謝辞と全体のまとめとして閉会の挨拶があった(写真33)、また最後に9月16、17日に千葉県で開催される第62回全国国保地域医療学会について報告があり、第36回地域医療現地研究会の2日間にわたる全日程が終了した。